

2025年10月

課題本 『しろがねの葉』

千早 茜/著 新潮社 2022年

◆◆◆10月の読書会から

先月の振り返りから始まりました。エンデが影響を受けたとされるシュタイナーの考え方と日本びいきだったエンデが物語の中で何を表現しているのかなど活発な意見交換の時間となりました。西洋思想と東洋思想の違いについても話はおよび、先月の読書会と同じように盛り上がりました。

今月の課題本は直木賞受賞作の『しろがねの葉』、戦国末期の石見銀山の物語です。

(文責:森下)

2025年10月 竹原読書会『しろがねの葉』

(千早茜／著 新潮社 2022年)

吉川五百枝

作者は、1979年北海道生まれの女性。幼少期には父親の仕事の都合からザンビアで暮らしたこともある。そこでの乏しい本の供給体験で、日本は本が少ないから、日本に帰ったら本をたくさん書こうと思ったそうだ。かくして作家になり、本をたくさん出版した。何回も新人賞、文学賞などを受賞して、この本で直木賞となった。そのおかげで、ナニナニ?となって、ウメにであった。白銀の葉が何事で、それが「わたし」とどう関わるのかわからぬまま、「わたしウメ」は闇を背負って小説に登場してきた。

常闇は何か？間歩か、胎内なのか、身に空いた穴をのぞいているのか。

直木賞ながら、初めの部分を読んだだけで、この小説には波乱が起きないだろうと想像出来た。豊臣秀吉の朝鮮出兵の時代、子どものウメは、人より自然に馴染み、木の洞の暗がりを玩具のように好んだ。しかし、年老いた婆を残したものの、家族での逃散の試みは失敗し、ウメは山中で家族とはぐれてしまった。一人になった幼いウメ。魚や木の実や根、それに薬草や虫や蛙まで食べて山を歩き続ける。自然に馴染むとは、こうして自分の命を守ることに繋がるのかと思う。ウメはこれから生きていける。何があろうと、命を繋ぐ方向へと歩くだろう。どんな生き方になるのか、厳しさは充分予見できるが、それをものともせず、自分は自分だと生き続けるだろう。

さよったすえにたどり着いた銀山で山師の喜兵衛に拾われたウメが、銀山にかかりわり、男の強さと弱さを知り、女の受け止め方を悟る生活は、初めからだいたい想像が出来た。卑猥な手口で犯され、思わぬ妊娠をした時は「ほら、こんなことになると予想出来たのよね」と、筋の進め方は予想通りで、ショックも何もない。小説としては、終始予想の付く進展で、波瀾万丈のおもしろさではないし、社会性のある鉱毒の告発でもない。想像を超える登場事物があるわけでもないのに、中心を外さない芯を持つ重石のようなものを感じさせたのは何だっ

たのか。

私は、最初の頁 1 行目の「赫然」という言葉が気になった。「赫」は、「赤い」という意味だ。明るいとか、勢いが盛んだと言う意味もあるが、読み終わって思ったのは「赤い血」だった。人体を駆け巡る血だし、怪我をしても流れ出る血だが、そういう目に見えて触れる血ではなく、「女」という全体像を象徴する「赤い血」なのだ。「女人」を「赤」という色で受け止めたのだと思う。

ウメは、暗闇を怖がらない赤子だった。「暗闇を怖れないのは獸だけじや。氣色悪い」という世間の常識にさらされながら、ウメは見えるものをじっと見つめる逞しい赤子だった。母親の出産は、赤い血の色だったが、ウメの目は底なしの黒さを湛えていた。

「間歩」という暗闇の空間と共に生きる生涯を、すでに見通したような暗さをみる。私も石見銀山の見学に行った事がある。その黒い洞穴を「間歩」と聞いた。ウメが居る場所は石見銀山の懐なのだ。そしてそこで、幼いウメは、銀の気が見えると言われた山師の喜兵衛にあった。

銀山の女は、生涯に 3 人の男を持つといわれるそうだ。鉛毒で男は早死にし、女は残る。子を産んで労働力を補わねばならないから、生きるために再婚を重ねる。

しかし、女が生涯で持つ「3 人の男」とは、それだけの意味だろうか。

この小説が、筋立ての奇抜さを強調していないのは、「赤い血」が象徴する女ウメにとって、「3 人の男」を描くだけで十分だと思ったのではないかと考えるのだ。

最初の男「喜兵衛」。

わしが信じとるんは錢だけじや。ウメはそういう喜兵衛の小屋で過ごした。山師の喜兵衛に言われるままに働けば米が毎日食べられる。喜兵衛について山に入ると、薬草の知識を身につけ、地形を覚え、地図の上での銀脈をしり、喜兵衛に頼らずとも生きていける術を目指すことが出来た。最初の男は、「育まれる幼い女」を、大きく包む男として描かれた。喜兵衛は、やがて佐渡の金山に向かって去り、そこで亡くなった。ウメが生涯を通して胸に刻んだ男だった。

2 番目の男は、間歩で働く、夫の「隼人」だ。

ウメは、ならず者に血の匂いが漂う穴を開けられ、望まぬ子を妊娠したが死産。だが隼人は、ウメの怒りを抱きしめてくれた。隼人は、女郎の産んだ子。目の中に、根深い怒りと昏いしさをもつ男だ。隼人との子、喜一、希、満次。ウメは間歩に入れぬ女の悔しさを心底に持っていたが、子をなして、咲いておれる生き方をきらった。

隼人も、他の銀掘りの男と同様に鉛毒に犯される。毒のせいだと見えぬ身は、上役がどうなろうと、銀が絶えない限り掘りつづけるしかない。咳は、働けなくなった銀掘りの肺と誇りを傷つける。叶わぬ望みを抱くより、平穏を手に入れる幸福を願う女としてのウメに、「育み育まれる対等な関係」を持つ 2 番目の男を配した。

3 番目の男は、異国の血が混じる目をしていた。喜兵衛が温泉津への道中の石切り場に置かれた子を銀で買ったのだ。「龍」という。瞳が海の青さで月を映す。水浅葱の双眸は、静かになにもかもを受け入れる。ウメの前に現れた時は、もういい若者になっていた。ふつふつと命の火を燃やす龍。ウメは女としてその龍を受け入れた。

「3 人の男」は、「赤い血を育んだ男」、「赤い血を育み育まれた男」、「赤い血が育んだ男」。

ウメの生涯を追うことによって、「赤い血」の一生を描いた。

その間には、男に愛でられ、求められるためだけに磨き上げた女郎屋の「赤い血」が見せる涙もある。

その血が発し収束する「子宮」は、洞のように昏い。温い泥のような暗闇。脅かすものがいない。誰にも顔をみられない居心地の良さ。「赤」が女を象徴し、「黒」が間歩の闇を思わせる。
〈この躰に男を飲み込んで、自らが間歩になってしまえたらいい〉

ウメの赤い世界が、黒い世界を同化しようとする。

ウメを慈しみ、ウメが慈しんだ男たちは、〈皆、無慈悲で温かい胎闇にいる。そこに私も還るのだ。〉ずっと喜兵衛の傍に居て、拾われたウメを見つめていた男ヨキは、喜兵衛が亡くなつてから銀山に戻ってきた。〈あんたがどうなつたかみたくてここに来た。喜兵衛さんの生きる理が知りたかった。〉人は何故生きるのか、それは問うても答えはみつからない。だが、人はどう生きるのか、それならウメも自分の選択と帰結を語れるだろう。かくして1ページ目に還るのだ。

『しろがねの葉』を読んで

◆【 YA 】

石見銀山が稼働を始めて、採掘装置や方法が近代化されたのは、1800年後の後半とされるから、初期から中期にかけてのことだろうと思う。

家族と生き別れになり、小さな女の子が山をさ迷っているのを、山師喜兵衛に拾われ、彼と共に銀山での生活が始まる。女の子の名はウメ、小さな手に握っていたのは、しろがねの葉であった。

喜兵衛がそれを見て、ウメに何かを感じたのに、違いない。

身寄りの無いウメは父親のような喜兵衛にくつづいて、坑道にも入り手子のように働き、山には、喜兵衛の後を付けながら、山師としての姿を見つめている生活を送った。喜兵衛はウメに、鉱脈の見つけ方を教えていたのだろう。ウメを取り巻く人々の描写も深く、厳しい環境での生活をお互いに助け合う姿は、気持ちがいい。

こうしてウメは銀山の町で育っていく。

ウメも大人になり、幼なじみの隼人と夫婦になり、子供をもうけて、束の間の幸せを持つ。しかし、全て人の力だけで坑道を掘り、真っ暗闇の中での、空気孔もない所、銀を含む岩石の粉塵で、働く男たちの体を蝕み、若くして死んでいった。ウメの夫隼人も例に漏れず、もがき苦しみながら、死んでいった。死の前にウメに告げる。死んだら、龍と一緒にになって欲しいと。銀山で働く夫達の心が哀しい。次の夫との子供を望んでいるのだ。働く男を絶やさない為にだと。そうせざるを得ない夫達の存在。

ウメは龍と夫婦になり、子供をもうける。しかし子供を持つという喜びは、純粋では無い。男の子は、小さい時から手子として働き、大きくなれば、銀掘りとして、働く道が既に作られ死が数年先に待っている。選択肢の無い当時の男の子、胸が締め付けられる。龍も若くして死

んでいった。

ウメの未知の土地での女性としての存在は、どうだったのだろう。

身寄りの全く無い所で生きねばならなかつたウメには、希望を抱いた事があつたのだろうか。ウメもやがては最後の時が来る。夫達の悲惨な最期を見ながら生きて来て、酷な環境に翻弄されながらも、ウメは人生を全うするのだろう。死が近付いた時、隼人や龍の子供たちを前に、ウメは自分の辿ってきた苦しい哀しい人生は口に出さない。そしてウメは言うと思う。「お母さんはこの土地で、お母さんなりに、精一杯生きたよ。」と。

こういう時代は200年近く続いたのだろうか。銀の産出も沢山の人々の犠牲があつたから出来たのだろう。

◆【 ZK 】

銀山の観光地では掘っている労働者的人形が展示してあるのをテレビでみたことがあります。今回の本は労働者とその家族、とくに女の人の一生を描いている。地域の生活ぶりと感情がどろどろと書かれている。

山陰の暗い様子が最初いでできます。電気も無いし、蔵みたいなお家、虫、かび、ほこりがそこら辺にひつついているような日常。

私は虫が嫌いなのでゾッとした。

農業と、貧しさのなかで家族が生活している。突然その村を抜け出して家族で逃げていく。ウメは家族とはぐれて喜兵衛に拾われて銀を掘る人達の村にすむことになる。最後はウメが家族と再開することになるかと思って読んだらなんのその。

ウメの一生がここから始まりました。銀を掘る人達とその支配者の社会、山師、家族の人達が登場してきます。

ウメは喜兵衛に大切に愛されて育てられます。そして銀山の人達の仕事をみていくのです。成長していくにつれ回りの人達の性、いざこざ、社会、殺人のことを知っていくのです。

隼人という少年にみそめられ愛されて次の結婚生活が始まります。ウメは子育てとか夫を支えていくのです。が、重労働で過酷で不健康なので30歳迄生きられない。

ウメはいつも愛される人にめぐり逢いながらも短い結婚生活になってしまって、子育ては続していく。そしてウメはまた次の出会いへと繋いでいく。

人にはいろんな生活があるけど、出会って好きになって生活して、人と紡いでいくのが人の幸せなんだなあと感じました。

ウメは人との出会いで幸せになっています。

◆【 JM 】

舞台となっている石見銀山には、世界遺産に登録される前に行ったことがある。まだ観光化される前の町は寂れた宿場町のようで、その中に小さな資料館があった。銀の採掘や当

時の生活の様子が展示してあったが、展示の中に「30歳になると長寿の祝いをした」というのがあった。朱塗りのお膳に尾頭付きの鯛と赤飯、お酒」という展示を見て、涙が止まらなくなつた。30歳まで生きれば長寿なのか…過酷な生活を思い、見ているだけで苦しかった。その時の感情がこの本を読んでまざまざと蘇ってきた。

なぜこのような悪環境の中で生きなければならないのか、他に生きる道はなかったのか。しかし農村でもウメの生家のように米を作つても米は食べられず、年貢と兵役に苦しめられる。漁村でも「板子一枚下は地獄」という暮らしだ。武士も本書の中にある大久保十兵衛のように、何があったのか 7人の息子たち全員に切腹の沙汰が下りるというような理不尽なこともある。どの道も生きるのは難しいし、厳しい。

人は何のために生まれて、何のために生きていくのか… ヨキがつぶやいた「生きる理(ことわり)」が知りたかった。どうせたつた独りで死んでいくのに何故生きるのか」がこの物語のテーマだろう。生きる理由は人それぞれだと思う。正解はないだろう。

私はと振り返ってみれば、生きるのがしんどい時は「生まれてきてしまったんだもの、仕方ない」とやり過ごしてきたような気がする。子育てがしんどかった時も「産んでしまったんだもの、仕方ない」と乗り越えてきた。諦念だけではなく、進んでいかなければならぬ覚悟も必要だった。

はい、生きる理由は人それぞれです。だからこそお互いを尊重し、日々を楽しく過ごす努力も必要だと思う。

◆【伊達悦子】

小学校に通う道に、ベンガラ格子の長屋がありました。その前を通るのは好きではありませんでした。後にそこが置屋であったこと、我が町に繁栄をもたらした大森銀山からの「銀山街道」の宿場町であったことを知りました。繁栄の陰にある悲しみや喜びを今回の課題本を読む中で我が町の「明と暗」も重ね合わせて読んでいました。

シダ植物は、石灰岩地帯にも生え、貧土でも生きている植物で、私たちに馴染みのものも少なくない。ワラビ、ゼンマイ、コゴミなど春の訪れを感じさせてくれる。山からの恵みのひとつである。シダの葉は年中青いのかと思ひきや冬に白い雪の中で茶色に枯れたシダを見つけるとそこには、お宝である銀が眠っているようである。

家族で夜逃げをしたウメの一家。戦乱のなかで生き延びるために逃げるしかなかった。幼くして一人で生きていかなければならなかつた少女が、どう生きていったかの物語にあらず、登場人物のそれぞれの物語と絡めながら、父性と母性の対比、間歩から明と暗、と順当な対比だが、銀を得ることでの対比として、しろ(白)とあか(喀血)など生きること、それでも生きることを伝えてくれたように思う。

対比することで、よりはっきりと見えてくることがあることを再認識させてくれた作品でもありました。道具立てがうまい作品であることを読書会でも確認でき私の時代小説にある(どろどろ感)を嫌悪する気持ちを少しかえた作品でした。

◆【T】

親からはぐれ一人ぼっちのウメを保護した喜兵衛。彼は、大きく逞しく山師として銀堀たちから一目置かれていた。父や母のところへ帰ろうとするウメに、「ここで生きていく術を身につけるんじや」「おまえはおなごじやけ、わしらとは違う。子を産め。そして、銀を掘らせるんじや。ここでは侍も百姓も商人も同じよ。銀を見つけた者が生きられる」と言った。子を産むこと命をつなげていくことが現代とは比べ物にならないほど大切な事だったんだろう。

年頃になり異性として喜兵衛を見るようになったウメに応えることなく出ていったのは、自分が子どもを持つことができないと分かっていたからだろうか。あるいは、隼人がウメを幸せにする男と認め、彼にウメを託していったのだろうかと思っていた。

しかし、ヨキに、間歩で彼女を犯した男を殺したのは喜兵衛だと教えられ「殺すほどあんたを慈しんだ男は一人ですよ」と言われた言葉から喜兵衛の深い思いやり、ウメの幸せや健やかな成長を望む大きな心を感じられた。喜兵衛が出ていって何の便りもないことで、自分のことをどう思っていたのか不安な気持ちがあつたウメだが、〈殺してくれたのか。うちの躰を傷つけた男を憎んでくれたのか。あんな激しい想いを抱いてくれたのか。うちのために…震えるほど嬉しい〉と感じた。それは男女の愛情ではなく、ウメを包み込む父親としての強く深い愛情だろう。

またヨキはウメに問うた、「あんたは何故生きる。間歩という居所を奪われ、犯され、望まぬ子を孕み、惚れた男に去られても、何故生きようとした」と。

ウメは何故生き続けたのか？きっと龍の言葉にあるように、光る何かを見つけて生きてきたのだと思う。〈光る葉を見つけた。喜兵衛に出会った。間歩を知り、隼人と躰の蜜を吸った。花のような踊り子にも鶴のような女郎にも出会った。銀だけではない。艶やかな彩りは山の四季のように生きてきた道のあちこちで輝いていた。〉人生の折々で光る何かを見つけてきたウメ。それらを糧にして生きてきたのであろう。それは、ウメに関わる男たちにも言えるかもしれない。喜兵衛、隼人、龍、ヨキ、爺…彼らはウメの中に光る何かを見つけウメに引き付けられ生きてきたのではないだろうか。

◆【KH】

物語の舞台は、石見銀山および湯泉津界隈。かれこれ30年以上前家族で、テントとカヌーを車に積み込み、気ままな川遊びとキャンプを楽しんだ石見街道、江の川の思い出が一瞬蘇ったが、底知れぬ闇(間歩)で生きる男たちの壮絶な生き様。そして天涯孤独となったものの、奇跡的に喜兵衛と出会い、石見で強く生き抜いたウメの話。とくべつてしまえば、まあそうよねえ。。。と言えなくはないが、私はとても面白く、楽しく一気読みしてしまった。

読了後に気になるのはヨキだった。

訳ありで、喜兵衛に拾われ、片時もそばを離れぬ用心棒、命じられれば、戦場へも命がけで出向く、おそらく喜兵衛が最も信頼を置いていた男。それがヨキだった。

「山師は、山の声に従って生きるんじや」

「掘り尽くせば、山は弱るけえ、そうしたら次の山へ行くんじや。誰の家臣でもねえ。誰にも従

わねえ。常の生き方じやねえのう」と語っていた喜兵衛。そんな喜兵衛に惚れ込んで、命をかけて尽くしたヨキだから、喜兵衛が亡くなった後に、かつての小屋に戻ってきても不思議ではない。

さらに、岩爺のふりをして、喜兵衛の小屋に住むヨキ。

ウメ この銀の山に用などないはずじゃ

用？長生きの夢を見せてやってるんですよ

本物の岩爺は「古間歩に運びやした」

おとよも

首を掴まれ、「あんたはどうします？ 隼人が死んだら。おとよのように後を追うのか？」と、ウメに問うヨキ。

火箸で印をつけた男を殺すほど、あんたを慈しんだ男は一人ですよ。

自分を犯した男を、爆発する怒りをもって殺したのは、ほかならぬ喜兵衛だったことを、ヨキから知らされたウメ。

瀕死の夫、隼人を慈しみながらも、ヨキから知らされた真実に、嬉しいなあと言葉を本音を漏らすウメ。あんたは、野生を保ったまま、そのまま生きていけばいいと、ヨキは告げる。そして生きる支えを失ったヨキは、このあとどこへ向かうのだろう。天涯孤独はええもんじやぞ という喜兵衛の言葉を噛み締めながら。

隼人の言葉

「お前が喜兵衛さんを忘れられんのは、間歩におったからだと思うとった。あん人の手子じやつたから。忘れてくれると思うのに、お前は人目を忍んで仙ノ山に行くけえ、悔しかったのう。間歩はおぞい場所じや。じゃが、俺らの稼ぎ場だ。生の糧だ。俺らを繋ぐ大きな大きな命じや。」

ウメは、隼人が、間歩のなかに還ろうとしているんだと気付いた瞬間、涙がこぼれた。

ウメ、俺が死んだら龍と一緒に…

隼人の死後、龍を海に誘うウメ。海に帰れと、龍を諭すウメ。

ウメを美しいとしたう龍 結局、龍を受け入れる。

龍も、隼人の息子も龍の息子も肺を病み死んで行った。

それでも待っている、指先すら見えないくらい間歩の底から男たちが私の名を呼ぶのを。慈しんだ男たちは皆、あの無慈悲で暖かい胎闇にいる。そこに私も還るのだ。

そう語るウメの耳には、喜兵衛の言葉がこだましていたのだろうか「山の胎闇が光を瀧すんじや。銀はそうして生まれる」

暗闇を好む鬼娘

吉川先生が指摘された、血の色の強さがこの小説の勘どころという事。

関連本として、当日借りて帰ったのが『雷と走る』千早 茜

この本は、アフリカのザンビアがメインの舞台。父の転勤に伴い家族で赴いたアフリカ。少女(おそらく、幼少期の千早さん?)が仲良くなるのが番犬の虎。リッジバックという犬種で、忠誠心が強く飼い主以外には無関心。

『血の赤』この小説にはまさに、ストレートに獣の血、匂い、獣臭さが、嫌悪の対極に位置するものとして描かれる。そして獣の本能に対する“私”的羨望の眼差しや、幼少時の番犬虎を

魂の伴侣と记すあたり。“私”を通した千早さんの世界観が感じられた。

◆【K子】

「しろがね」は羊歯植物の一種であって私に馴染みなものは「裏白」です。しろがねは銀の所在を教えてくれる羊歯です。タイトルの「しろがねの葉」から銀→銀山→岩見(舞台)→銀を採掘する話に展開します。採掘の様子・過程・仕事に関する人たち(さすが直木賞)手にとる様に描かれています。

登場人物

・ウメ(主人公)

貧農に耐え兼ねてウメ一家は父・母・弟(祖母は村に残します)で村を出ます。当然のように……ウメだけが奇跡的に助かります。幼い少女ですがとても夜目が効き生きるための知恵を身に付けていました。例えば野山・河(川)などで食せるものの見分け

・喜兵衛(ウメを助けた男)

銅鑼声・山師(銀のありかを探す第一人者)感性豊かでウメに「薰風」と言う言葉を教え、五歳のウメに銀山のこと・自然に向き合う生き方のありとあらゆることを慈しみをもって授けます。悲しいことに男親にはなれたのですが、女親の教えが出来なかったのでウメは初潮を迎える前後、とても苦します。

・ヨキ(喜兵衛の家人?)

小柄・腕に入れ墨(罪人・奴隸? 忌むべき印がありました)主人にはとても献身的に仕えます。

・隼人(ウメの幼な馴染み)

彼の母は遊女だったので……ウメの最初の夫です。三人の子ども(男・女・男)をもうけます。

長男の喜一も間歩に入り銀掘りになります。※二人の描かれている場面で印象的だったのは、つつじの蜜を吸い花殻が地面いっぱいに赤い色が広がっていた箇所です。

・龍(二番目の夫) 貿易で渡來した男の子ども

龍の瞳はブルー(青浅黄)石工の腕もありました。二人の子どもの目の色は黒でした。やはり間歩に入ります。

このように読み進めてくるとウメの一生の物語と思いきやいやうではなく、赫然たる山・ウメの初潮の赤・男達は銀の病に犯されて若くしてこの世を去る時、血を吐く中で再婚をすすめ子どもを産むことを希むのです。血の色の強さにほら穴(間歩)→子宮→子供を産み銀の山を守る人間の性が思われました。

もっと深く知りたいこともありました。

・手掘りで人間が馬に乗って通れる間歩

・男達が若くて死んでいく中で医者が登場しないこと

紙面の余白から縁という切り離せないもの。時という計れないもの、人間の知恵の深さ(薬草から得たもの)16世紀中ごろに銀に燃えた人々の営み、とても深い深い小説でした。

◆【望月悦子】

千早茜の作品は初めてである。読む前から時代小説だろうか、いつの時代で場所はどこだろうかなどと思いながら紐どいた。本の表紙は下地が黒で美しい葉だけのシンプルなもの。ここにも何やらこの作品の意図が隠されているようにも思えた。

「しろがね」と言えば万葉歌人の山上憶良「しろかねもくがねもまたなにせむにまされるたからこにしかめやも」を思い出した。11ページに「山を二つ三つ超えた岩見の国にな。筑前の商人が見つけたしろがね(銀)の山か」となると石見銀山？ 31ページには「百姓は百姓としか口をきけなかつた。役人や侍に話しかけたり、背を向けたりすることは許されなかつた」36ページに「要害山にある山吹城はな、もとは尼子の殿様の城じや。今は安芸の毛利がこらをおさめてとる」となると戦国時代の中国地方の話となる。

冒頭「夜目が利く童だと、ことあるごとに言われていた。暗闇を怖がらない赤子だった」とここにも何かしらヒントがありそうだ。赤子？ では男児・女児のどちら。23ページに「四つ、五つの童っぽに女も男もなかろう」「その童はおなごじやないのか」とある。名前はウメという縁起の良い名であることも。親から離れた4・5歳の女の子は銀の気が見えると謳われた山師 喜兵衛との出会いから特定の人間関係が生まれている。「お前はここで生きていくほかないんじや」ということから、石見銀山の間歩で手子として生きていく。主人公のウメは理不尽な言動に対しては噛みついででも主張を通す気性の激しい女の子が、暗闇の冷氣漂う間歩と何もないただ自然ばかりの環境の中で女性として成長していく物語であろうか。

「おなごには闇での勤めがあるじゃろう。そこで間歩と変わらん闇じや」岩爺の言葉に対して「うちはおなごじやのうて、ウメじゃ喜兵衛の手子じや」と女であることに拘り間歩での働きに執着するウメを、著者は3人の男性によって、女としての理に適った生き方を見つけさせている。

一人目の喜兵衛は父親的・師匠的・薬剤師的な存在として。「その目のお陰で、山で生き抜けたんじや。山で稼ぐためには、知識もいる。その花独活は若葉は食える。根は頭痛、感冒に効く。谷間や林の隅っこちいと湿った土を好む。ひと月もしたら白い花が咲く。あと汁がついたらかぶれるぞ」と生活の随所に薬草の効力を生活に取り込ませている。また、父親として難しい初潮についてはおとよに『初花じやな』たじろぐウメをよそに『花がのうては草木は実をつけんじやろう。その血はな、実を孕めるようになった証じや。花が咲いて、血の道が通ったんじや。めでたいことなんよ』と教えさせている。また彼の立派と思える価値観が2か所出てくる「喜兵衛は無闇に掘ることはしない。湯水のように銀が出れば、人が押し寄せ、山は廃れる」と人間の欲と自然の摂理についてさらっと戒めている。「ヨキの腕の入れ墨を照らした。藍色の文様はうねうねと皮膚を彩り、触るとひんやりした。『奴隸か、罪人か、恐らく忌むべき印じや』見てやるなというように目を逸らす。『ヨキはヨキじやけ』とウメはいった」と差別や偏見を無視し人は人であることと優しさを教えている。更に「大きくなつてもお前は女じや。女はどうやっても力じや男に劣る。おとよの柔らかく、弱く、なんも知らん顔しておれ。油断させるんじや。それも女の生きる術ぞ」女性としての処世術も厳しく教えている。また、「見てみい。この砂粒の如き黒色のまだら模様、日にかざすと白く光るじやろう。これが粹銀(とじぎん)じや。鉛の気が混じれば青味を帯び、銅が混じれば黄味を帯びる。岩見の岩は軟らこうてええのう。お前が見つけた蛇の寝ござによ似た光じやろうが。これが銀の光ぞ」と山師の

知識を伝えながら、夜にはしっかりと抱きしめて甘えさせ一緒に眠るなどの親としての愛情も注いでいる。基本的信頼関係をきっちりと育てながら、豊かな人間性もさらりと育んでいる。

二人目の隼人は、かつて喜兵衛とウメとの会話で「女は貴重じや。…子を産めるけえの」「男に使われるしかないんか」「男は女がおらんと生きていいけんのんじや。おまえにもじきに分かる」隼人は女の子であったウメを、男性として夫として間歩での女の役割について気づかせ変容させていく。また、この本の描写が実に美しい。精細でイメージしやすく、特に性に関しては生きていくには欠かせないことを赤裸々に美しい表現で描写されているのは同性として心地よい。表紙の美しい葉は羊歯で 18 ページに「闇に光るものがあった。葉のようだった。あかるい緑色で、羽毛のようなかたちをしている。葉脈の一本一本が、夜空の星を集めたかの如く、瞬いている。よく見ると、光の粒が葉の中を動いていた。根元から葉先へと吸い上げられている。光の粒は震えているようにも、囁いているようにも見えた」と描写している。なんとなくイメージはできるが実物を見てみたいものだ。銀山では「地中の銀を吸い、弦(つる)の在処を教えてくれる羊歯」と昔の人は自分たちの五感を通して自然から大事なものを発見し生活に取り入れている。今でいう鉱山病にも「黒文字の樹液と松葉を煎じたもの。咳をしている銀堀がいたら飲ませるといい」「梅は毒消しになる。未熟な青い実を真っ黒になるまで燻して烏梅という薬をつくっていた。銀堀たちが間歩の毒を吸ってしまうのなら、梅でその毒を抜けないものか」「枇杷の葉を干した。咳を鎮めることができる」と夫婦で病に戦いながら「あの闇に馴染む者はよう生きれん。長いこと潜れば、石粉を吸うて肺を病み、息を奪われ、青い唇で、咳に潰されるいうに死んでいく。間歩はおそれないけんのじや。おまえはおなごじやけえ、わしらとは違う。子を産め。そして、銀を掘らせるんじや。ここでは侍も百姓も商人も同じよ。銀を見つけたものが生きられる」と間歩は怖い場所であることを知りながらも稼ぎ場所であり「生の糧だ。俺らの繋ぐ大きな大きな命じや」という男の役目に対し、大事な隼人を守るために、喜兵衛から教えられた知識で守ろうとする。どれほど的人事を尽くしても、如何せんあの時代の銀山では薬草で治療するしかなかったであろう。父親としての隼人は、滅多に作れない無名異を自分は服用しないで我が子に残している。手子から始まって銀堀になる息子たちの命をつないでいくしかないのだと思うと切ない。ウメも間歩での女の役目が重々分かっているから三人目の龍には、「母性に近い感情で体の中に入れてやりたいと思った」と繋げている。小鬼と呼ばれていたウメが、一本筋の通った銀山での「おなご」として生きた生き方に敬服したい。実に面白い美しい小説であったと感動した。

◆【 MM 】

著者の千早茜については「わたしの一冊」の時に選んだ参加者がいたり、人から勧められたりして名前は知っていたがじっくり読んだのは初めてだ。今月の課題本『しろがねの葉』、序盤は「なんだか血なまぐさい物語ね」と感じたもののいつのまにかページをめくる手が止まらず「ああ、今日はここまで」「寝ないと明日寝坊しそう」と数日で1回読み終えた。2回目は読書会が始まる数日前から読んだ。最後の章の後に初めの見開きにある「常闇にいる～(中略) そして、また闇から生まれ、闇へと還っていく。」を読むとまたウメの人生をなぞりたくなるか

ら不思議だ。

女だから、男だからと分けるのは好きではないが、どうにもならないことがあるのは確かだ、とこの本を読んで感じた。女性には生理がある。これは産む性には必要なもので、それを穢れというのを理解できないが、だからと言っていままでのしきたりを変えてまで何かをしたい、との強い意志をもったことはない。銀堀に女はいなかった。間歩が穢れるし、女がうろついていれば男の気が散る。ウメも初潮を迎える頃には身体つきが変わり、間歩で伝兵衛の付き人たちに襲われた。その後も付き人の一人が喜兵衛の留守中にウメのところに再度手籠めにしようと訪れた時などの暴力の描写が現実のようで、ウメの声にならない悲鳴が聞こえてきて心まで踏みにじられるような気がした。しかしその後、ウメの小屋まで来た男が顔もわからないくらいぐちゃぐちゃにされた死体で見つかり、もう一人ウメに乱暴した男もヨキの助けもあつたが最後はウメの手で復讐することができた。この描写も詳しきったが気持ち悪いというよりも、ウメがされた仕打ちの復讐だ、とスカッとした気持ちになった。

喜兵衛が去ってからは隼人と家族を作り家庭を守った。喜兵衛とは夫婦になれなかつた。喜兵衛はウメのことが好きではなかつたか？いや、大切にしていた。だからウメを傷つけた男を正体がわからなくなるくらい傷つけて殺めたのだろう。隼人はウメを愛していた。他の男の子を孕んだウメでもかまわない、と言つた。「俺が死んだら別の男に嫁げ」と言い残し銀堀がかかる病におかされて死んでいった。その後、龍が出てきたのは意外だったが、まったく理解できないわけではなかつた。龍はウメを慕っていた。その想いをウメは受け入れた。この物語を通して、いろいろな愛情があることを改めて考えた。女性初の銀堀にはならなかつたが、その時代の女の物語を見てくれた。生々しかつたり、残酷だつたりした場面もあつたが、そのどれもが違和感のないものだつた。だからめりこんだ。

ウメは銀堀になれなかつた。性差によって就けない職業がある。今回で言えば銀堀だが、大相撲の力士や歌舞伎役者には女性はいない。かつては女性がいなかつたが今は女性が活躍している世界もある。神楽や能、狂言などは女性がいるそうだ。初の女性弁護士、裁判官をモデルにしたドラマも記憶に新しい。私の職場の上司も女性管理職だ。私は結婚と同時に離職し転居して今に至るが、上司を見ていて「もし仕事を続けていたらどうだったかな」と想像したことがある。共働きが当たり前になつた今、女性が（前より）働きやすい社会になつてうれしいと同時に、道を切り開いてきた女性たちを尊敬する。仕事と家事、育児を家族と分担するのは当然だが割合を見てみると等分になつてゐるか？折り合いをつけながら仕事を続けていくことは本当に難しい。それをこなしてきた先輩たちに頭がさがる。彼女たちが続けてくれたから今の道があると思うのだ。今月は物語を通じて「女性とは、女性の生きる道とは…」ということを考え、自分はどうかなど振り返る読書会でした。